

The Sad Fortunes of the Reverend Amos Barton

George Eliotの小説における gossip, rumor の働きについて (3)

The Sad Fortunes of the Reverend Amos Barton

On the functions of gossip, rumor in the novels by George Eliot (3)

嶋 田 貴美子

Shimada Kimiko

キーワード：Church of England, Evangelicalism, pathos, humor, rumor, gossip

(13)

The Sad Fortunes of the Reverend Amos Barton の小説は、当学紀要27号の同タイトルの論文に筆者が書いたように、それまで翻訳や評論など non-fiction の分野でのみ活躍していた George Eliot が、小説の分野にその文筆活動の方向を転換するきっかけを与えることになった、いわば小説のジャンルでの文豪 George Eliot の出発点となるべき作品である。従ってこの *The Sad Fortunes* の小説の冒頭部分には fiction に対する彼女自身の独自の執筆態度が表明されていて興味深い。この小説はまず次のような文章で始まっている。

Shepperton 教会は25年前には建物の様子が今とはすっかり変っていた。教会のどっしりとした石の塔は、もちろん今現在でも教会の聡明な目ともいふべき時計を通じて、過去の時代へのなつかしげな表情を浮かべて、あなたを見つめているのだけれども。⁽²⁾

25年前といえ、この小説が1855年の、George Eliot が36歳の時に書かれたものであるから、1830年頃の彼女が11歳の頃の事を指すことになる。*Adam Bede* や *Silas Marner* はそれよりさらに20～30年前の1800年から1810年頃の story であるが、*The Mill on the Floss*、*Felix Holt the Radical* それに *Middlemarch* がほぼその1830年代前後に時代背景が置かれていて、これらが George Eliot の小説の中でとりわけ傑出した話題作であることを考えれば、彼女が小説を執筆する上でとりわけこの時代に好んで焦点を当てた特別の意図を感じるのである。

前号紀要の同タイトルの論文の chap. 12 に大よその状況は述べてあるが、あえてもう少し掘り下げてみるとこの1830年頃といえ、激動の時代の多かったイギリスの歴史の中でも特に激しい社会変革のあった時代であるといえることができる。また過去のイギリスの社会を語る場

合に政治と宗教を切り離して述べる訳にはいかないのであるが、当時のこの社会変革はまずは、農村におけるエンクロージャーの激化と産業革命によってもたらされた資本主義社会の確立に伴う政治的な権力の変化により引き起こされたものであった。つまりエンクロージャーという土地の耕作形態の変化と共に大地主や領主によって開放耕地や共同放牧場などが囲い込まれ、域外に追い払われ自分の耕作地を失った農民達はその多数が没落し、低賃金の農業労働者や工業労働者となり、つましい生計に甘んじることを余儀なくされたのであった。さらに産業革命によって勢力を増してきた新興ブルジョアジーである産業資本家、商工業者はいよいよ勢いを得て、政権は世襲的権力を保っていた貴族から中流階級の彼らに確実に移行しつつあったのであった。そしてこの傾向を決定づけるかのように1832年9月1日のReform Billの議会通過に伴ないその法令により行なわれた最初の選挙では、ConservativeであるWelling公のTory党内閣に変わってLiberalであるGrey伯のWhig内閣が政権を担うことになり、以後自由党内閣の時代は保守党の場合より三倍ほど長く続くことになるのである。

George Eliotが*The Sad Fortunes*の冒頭で深い感慨を込めて思い出している建てかえられる以前の古い教会がShepperton村のsymbolとなっていた1830年頃といえ、このReform Actが制定される2年ほど前のことではあったが都市部において勢いを得てきたそのLiberalな風潮は、地方の町や村にもいろいろな形をとって入りこんできてその地域共同体の持つestablished orderや、そこに住む人達がそれまで何の疑いも持たずに依拠していた価値観などに対する絶対性を根底から揺るがす恐ろしい力となりつつあったのである。

具体的な形となって表われたものは、上の引用文のすぐ次に続く文章の中にも述べられているような新警察法 (New Police)⁽¹¹⁾、10分の1税換算法 (Tithe Commutation Act)⁽¹²⁾、1ペニー郵便制等であり、「人間にもたらされるべきあらゆる進歩への保証」⁽¹⁴⁾が次々に打ち出された時代でもあった。しかしそれらよりももっと地方の町や村の人々のestablished orderを脅やかし始めたのは、先にも記したように商工業に於けるばかりか農業の分野においても資本主義化が進み、*The Sad Fortunes*の中でも度々語られるような、農場労働者や靴下職人 (stockingers) などの、村の周辺に現われ始めた低賃金労働者の増加であり、彼らが深く信奉するDissent (非国教会) の各宗派の普及であり、また彼らと強く結びついたMethodism⁽¹⁵⁾の流れをくむEvangelicalismの台頭であった。それと共にカトリック解放令 (Catholic Emancipation Act)⁽¹⁶⁾が出され、こうした宗教の変革はそこに長い間住んできたすべての住民に直接かわる問題であるだけに「けんけんがくがくたる議論を巻き起こして田舎に住む者達の心をかき乱した」のであった。

Evangelicalismというのは、当学紀要27号の同タイトルの筆者の論文12章で述べたように、従来の国教会 (Church of England)⁽¹⁸⁾の在り方に疑問を提し国教会を高教会 (High Church) と低教会 (Low Church) に分割し、Methodismの系統を引くより厳しい戒律や教義を行なう、Low Churchから生まれた国教会の1つのセクトである。*Scenes of Clerical Life*の中に所収されている*The Sad Fortunes of the Reverend Amos Barton*、*Mr Gilfil's Love-Story*それに*Janet's Repentance*の三つの中編小説については、当論文が取り上げるこの*The Sad Fortunes*が

Evangelical の牧師 Amos Barton が Shepperton 村に *curate*⁽¹⁹⁾ としてやってきて二年後の story であり、*Mr Gilfil's Love-Story* はその同じ shepperton 村で、Amos が来る前に何十年という長きにわたり、まだ古い体制にあった国教会の教区牧師として牧師職にあった Gilfil 氏の story であり、そして最後の *Janet's Repentance* が、Milby という市場町で Gilfil 氏よりも更に長い 50 年という歳月を古い体制下の国教会の教区牧師として職を遂行してきた 80 歳余りにもなる老 Crew 牧師の同じ教区に、Evangelical の Tryan 牧師が *curate*⁽¹⁹⁾ としてやって来たというそのことが村人達に与えた衝撃と、またそれが遂には Tryan 排斥の旗頭であった弁護士 Dempster の妻 Janet の窮地を救うことになる story なのであって、そうしてみると *Scenes of Clerical Life* のテーマは、従来の Church of England が地方の町や村に住む者達に果たしていた役割と、そしてその従来の Church of England に変わっていきなり入りこんできた Evangelicalism がどのような影響を地域社会の public life に与えることになったかという一つのレポートとして見ることもできるのである。

The Sad Fortunes の冒頭部で、新しく建てかえられた新教会の前で旧教会に思いをはせる George Eliot は、そうした建築の様式にもはっきり現われ、またそれが当世のもろもろの変革の一つの象徴ともなっている新しいものと古いものとの間の大きな gap に対する彼女自身の立場を、次のように述べている。

「ものすごい改善だ！」と物わりのよい人たちは言い、そして「新警察法」や「10分の1税換算法」や1ペニー郵便制等人間にもたらされるべきあらゆる進歩を保証するそれらすべてのものを絶えず喜びをもって迎える。彼らはあの愛すべき古い褐色の、今にも崩れてきそうだが、でも画趣のある非能率が、新しく着色され、ぴっぴかにニスでぬられた能率にいたるところで入れかわり、やれ図表だ、平面図だ、立面図だ、断面図だと数限りなく作り出しはするものの、でもああ悲しいかな、結局何の絵もそこにはないのだということがわかって、失望でがっかり落ち込み、想像力がほんの少し Toryism に傾く間に、保守的改良主義者ならついうたたねをしてしまうのに、そのようなことも全くないのだ。私はと言えば、恐れながら物わかりがいい方ではないし、昔の悪習を懐かしく思い出したりすることも多々あるのである。つまり鼻声の執事や乗馬靴をはいた牧師さんのいた時代への執着がどうしても断ち切れず、過ぎ去りし頃の通俗的に墮したもろもろの誤りの影を求めてため息をついたりする。だから粗雑な化粧しっくいの外装や、赤瓦の屋根、小さな彩色ガラスがとりとめもなくはめられていた窓、外壁を登り、学童用の2階階段に通じている小さな階段などがあったありし日の shepperton Church を、一抹の哀感をもって思い出したとしても驚くには当たらないことである。⁽²⁰⁾

Shepperton 村は、George Eliot が少女時代を過した Warwickshire の Chilvers Coton をモデルにしているといわれ、従って shepperton Church も彼女が洗礼を受け、少女時代にせせと礼拝に通った Chilvers Coton Church をモデルにしていることは明らかなのであるが、その Chilvers Coton で大工 (carpenter) として、農夫 (farmer) としてまた土地差配人 (estate manager) として生きた父親の Robert Evans の愛を一身に受けて育った娘時代を象徴する古き Shepperton Church を愛惜する彼女の思いの中には、もともと心情的に Wordsworth⁽²¹⁾ の *Lyrical Ballads* の preface の主題をなす “humble and rustic life” (「質素な田園生活」) への礼賛に大きな影響を受けていたことともあいまって、この引用文の中で自分のことを自ら

conservative-reforming intellect と言っているものの、そこに見る限りにおいては reforming を是認する気持よりも古いものを愛惜する気持の方が強く表明されているのはいたしかたないことであるのである。しかし新 Church が引用文にあるようにこれほどまでにすっかりと変ってしまったとしても、彼女の鋭い目はその New Church にわずかに見られる旧 Church の面影を見逃がしてはいない。それはこの論文の最初に引用した文の中に見られるように、新築のその Church の石の塔にかかげられている時計であり、その時計こそどんな急激な変革にも屈することのない、過去と現在のそれからまた未来の時を結ぶパイプとしてそこに存在するのである。そういうところに視点を向けていることに着目すれば、時代の趨勢にそった形での reform は、そう積極的ではないとしても一応是認しようとする、いわゆる conservative-reforming intellect の態度がかいま見えると言えるかもしれない。

とに角 George Eliot の小説は彼女の最後の小説である *Daniel Deronda* 以外のすべてが執筆年代の 25 年以上もの過去に時代背景を持っており、そうすることで小説を執筆する上で彼女が目指そうとしたことの中には、1857 年 1 月に *Blackwood Edinburgh Magazine* に *The Sad Fortunes* が掲載され初めて公衆の目に触れた時、Jenifer Gribble が評したように、「humour や pathos、深い知識や議論に対する読者の希求にじかに訴えようとする意図」⁽²³⁾があったのであった。その意図の実現のために彼女は public life をつぶさに見、そしてその中にある pathos と humour を描くのに格好な背景として自分の幼少期、つまりイギリスの地方都市がまだ近代化の波に洗われる以前の rural life を選んだのである。というのはそうした古い体制下の地方都市は、平和だった古い過去から培われてきた厳然とした正義感や価値観などの住民の生活の指針となる独得の道德律が根強い規範となってその community を縛る closed community であって、彼女が小説の中で表現しようとした humour と pathos はそうした中でこそ効果的に描かれ得る主題であったのである。*The Sad Fortunes* の中で描かれる Evangelical の Amos Barton 牧師の Shepperton 村におけるほんの 2～3 年の生活が読者の心に訴えた pathos と humour がどのようなものであったかを考察する前に、Barton 牧師が来る以前の、旧国教会の典型的な教区牧師であった Gilfil 牧師が牧師職にあった頃の Shepperton 村の精神生活の実態を見てみる必要があるであろう。

(14)

Gilfil 牧師は何十年という長きにわたり Shepperton 村とその隣の Knebly 村の教区をかけ持ちしていた vicar⁽²⁵⁾で、「彼の公務である精神的な役割については今一つぱっとしない」⁽²⁶⁾ということは衆目も認めるところであるのに、George Eliot 自身 “an excellent old gentleman”⁽²⁷⁾と賛辞を送っているように、Knebly の農民達は「彼らの教区の牧師さん（つまり Gilfil 牧師のこと）を批判しようなんていうぐらいなら、月でも批判した方がましだろうと思ったものだ」。そして George Eliot はさらに Shepperton 村や Knebly 村の community と Gilfil 牧師の導く宗教生活とのかかわり方を次のように解説している。

牧師というものは市場や通行料金所や手あかがしみついた紙幣などと同じたぐいの、自然の成り行きに属するものであったのである。つまり彼らの教区牧師であるからには、村人の尊敬に授る牧師の権限は、村人達の資力にはなはだ負担をかけることにはなるものの、そうだからと言ってそれが多少なりとも減じられるようなことはなかったのだ。ばねなしの幌馬車などというぜいたくにうつつをぬかすことのない村人達の中には、(日曜日には) いつもより30分前に食事を済ませ、はるかなぬかるみの小径を行く時間をたっぷりとして、2時にはちゃんと彼らのいつもの座席に姿を現わすのであった。……祈とうと応唱句が交互に唱えられ、それが何とも心地よい説教にとって変ると、誇り高き家の主たちは次第に安らかな眠りに落ちることもあったが、彼らは決まって礼拝をしめくくる頌栄歌が始まると目を覚まし、それから再びぬかるみの小径を家に帰って行くのである。それでも彼らは多分、良きもの正しきものであると思っていることがらに毎週このような単純な尊敬の証を立てることで、このごろの覚醒した批判的な会衆が得るものと同じほどの満足を得たことであろう。⁽²⁴⁾

つまり1800年～25年頃の Shepperton 村や Knebly の村の村落共同体とその精神生活を司どる Gilfil 牧師との間には、理想的な相互関係が成立していたのである。George Eliot は *Mr Gilfil's Love-Story* の中で、shepperton, ...was in a state of Atica culture compared with Knebly と述べ、Knebly 村の文化的水準と比較された Shepperton のそれを高く評価はしているものの、⁽²⁹⁾ 当時の地方の農村に住む人々の教養は低く、彼らにとっては雲上人とも思われる、⁽³⁰⁾ 教養の最高学府である「オックスフォード大学」の出身者がほとんどである牧師の教区での立場は極めて微妙なものであり、*Adam Bede* の Hayslope 村の Irwine 牧師や *Middlemarch* の Farebrother 牧師などのように先祖代々の牧師館を継承する者や何の変化も望んでいない豊かな農村における実質よりも宗教の象徴としての存在意義を持つ牧師とは異なり、伝道者としての高邁な熱い思いを抱いた牧師は、新しい教区への赴任当初から教区民との間に好い関係を持つことは極めてまれだったのである。というのは当時の地域共同体においては貧しさというのは「恥ずべき悪徳の一つである」と考える裕福な農民が大勢を占め、世の中の工業化近代化による貧しい農場労働者や靴下職人 (stockingers) も村にまだ入り込んでおらず、非国教徒 (Dessenter) とか福音主義 (Evangelicalism)、Oxford movement、⁽³¹⁾ High Church、Low Church、Independent Chapel などが地方の村や町を騒がせ始める大分以前にあっては、村はそれまでの established order に最高の価値を置き、*The Sad Fortunes* の冒頭部に描写されている old church に表象されているようにすべてにゆとりがあり、とりわけ public life の時間はゆったりと過ぎそこに住む人々は正直で善良であることを何よりも誇りにしていた時代であった。Gilfil 牧師が牧師職にあった当時の Shepperton 村も「中央にこじんまりした魅力的な牧師館と灰色の教会があり、きれいで気持のよい村々」の一つであり、George Eliot が言う “glory” に満ちた、堅固な established order が支配する典型的なイギリスの地域共同体であったのである。そのような村落の中では Gilfil 牧師はオックスフォード大学出身であることによる豊富な宗教的教養が要求されがちである厳しい教義や戒律を説く必要もなく、ただ日曜毎にありきたりの説教をし、村の日常に節目や規律を与える、つまり村人の生活にリズムを与えるという機能的役割を果たすだけで十分意義があったのである。そうした Gilfil 牧師の牧師とし

ての活動について George Eliot は次のような具体的な言葉で叙述している。

「今朝の礼拝ではとてもためになるお説教をききましたねえ」という言葉が、あの古びて紙も黄色に変色している説教集の中からの一つを聞いた後、村の中でよくきかれたものだった。それももうかれこれ 20 回もきいたお説教なので、その言葉にはなおさら満足がこめられていたのである。というのは Shepperton 村の人々の水準からしたら、彼らの心に最大限の効力を発揮するものは、目新しさではなくて繰り返しだったのである。そして説教で聞いた語句は、歌の調べのようになじみ深く頭に刻まれているのである。御想像にたがわず Gilfil 牧師の説教は、高邁な教理や論争を巻き起こす問題を提起するようなものではない。多分強く良心に訴えるというものでなかったであろう。…またそれは Shepperton の村人達の知力に決して無理な強要をするものでもない。…この時代では牧師の説教にけちをつけるのは、宗教そのものにけちをつけるのとはほぼ同じことであると見なされたのである。⁽³³⁾

このように実質生活においては地主を、そして精神生活においては牧師を上を頂き、日常生活においても精神生活においても調和のとれた状態が長い間維持されてきて「Gilfil 牧師は純粹な Gospel (福音) を説いているのだろうかとか彼の教義や彼の説教のやり方には非難の余地があるのではないかというような思いが教区民の心にわき上がるようなことは決してなかった」⁽³⁴⁾のであって、Shepperton 村の共同体としての均衡がそれから 10 年ほどして次第に壊れていったのは、先にも述べたように世の中の近代化と、shepperton 村の都市化によって低賃金の農場労働者や stockings、織工等の貧民層が村の周辺に目立ち始め、彼らがすでに持っていた Dissent (非国教会宗派) やまた新しい Evangelicalism が勢力を拡大し始め、教区牧師も Evangelical に交代していくに及んで村に確立されていた独自の価値感が変化せざるを得なくなったことによるものであった。

紀要 27 号同タイトルの筆者の論文(2)でも述べたようにこの論文のテーマに直接かかわる *The Sad Fortunes* の中の Amos Barton 牧師も Evangelical で、Gilfil 牧師の死後 5 年後に Shepperton に赴任してきて、もはや 2 年がたっているために、Barton 牧師自身への批判や非難は村人の中に確かに厳しいものがありはしたが、彼の信奉する Evangelicalism そのものに対する反感はもはやかなり落ち着いたものとなっているように見受けられる。しかし *Scenes of Clerical Life* の最後の小説である *Janet's Repentance* には、市場町 Milby の Paddiford 共有地にある礼拝堂に最近やってきて活発な宗教活動をやり始めている Evangelical の Tryan 牧師について牧師自身というよりもその Evangelicalism に対してその小説の冒頭から町の人々の激しい反発の生の声がきかれるのである。つまり Tryan 氏はもはや 50 年ほどの長きにわたってその Milby の町の教区牧師をしている老 Crew 国教会牧師をさしおいて、その同じ教区で宗教活動をやり始め目覚ましい勢いで新興の住民たちの心をとらえ始めたのであり、そのことに対して Tryan 牧師は古くからの町の御歴々たちの逆鱗にふれたのである。

Milby の Red Lion という酒場で酒を飲んでいる者達のほとんどすべてが Tryan 牧師の排斥運動に強くかかわっているが、中でも土地の最有力者である弁護士 Dempster 氏は次のように言って Tryan というよりも Tryan 牧師がいきなり持ち込んできた Evangelical の宗派に対する非難の口火を切る。すると周りにいた者達は堰を切ったように次々に激しい口調で思いを

述べ始めるのである。

「神様が私の声と知力に力をお認め下さっている限り、私はあらゆる合法的手段に訴えても、村に一悶着を起すメソヂストがするような教義をこの教区に入れさせはしないぞ。もはや半世紀にもわたって健全な説教をしてきている尊い立派な牧師さんに向けてられた屈辱を黙って見のがすものか。」

(金持の製粉屋の Tomlinson) 「そうともさ。奴のあんな偽善的な話なんか止めさせる労なら嫌やしないよ」

(Luke Byles) 「実際のところこんな Evangelical なんぞ、断じて国教徒じゃないぜ」

(Tomlinson) 「奴は聖書も何も持たないで説教するってことじゃないか。それじゃ非国教徒 (Dissenters) と大して変らないよ。だからどうしてもとりとめのない話になってしまうんだ」

(Dempster) 「それだけならまだいいよ。あいつは善行を非難するような説教をするんだ。つまり善行が必しも魂の救済に必要な訳ではないと言ってね。そんなこたあ党派主義者 (Sectarian) か非道德主義者 (Antinomian) かまたは再洗礼派主義者 (Anabaptist) の言う教義だよ。人は自分の良い行いによっても救われることはないのだからって言うてみるよ、あらゆる不道德に歯止めがつかんようになる。そういった事態はあの宗教的改革者と称するすべての偽善者どもの中に見えているではないか。あいつらはみな、心が邪悪に決まっている。……奴らは見かけが信心深そうに見える分、腹黒いっていう訳だ。……ところでこの Tryan だが、あっちこちうろつき回って、婆さん連と祈ったり、養育院の子供達と讃美歌を歌ったりしてるじゃないか。そうしながら実際は何をしようとしていると思うかい？ 奴が望んでいることはただ一つ、この教区に深く足を踏み入れて、あの老 Crew 牧師が死んだら、まんまとその後釜に座ろうと思っているのさ。」

(33)

つまり Milby の町の人々は教区牧師の老 Crew が 50 年もの間に築いてきた穏やかな精神生活を有し、生活のすべてにおいて均衡が保たれていた「現状のままのその町にはすっかり満足していた」⁽³⁴⁾ のであり、それら Evangelical の牧師達は招かれざる客であるばかりか、町の者達が何より大切にしていた establish order と “glory” に満ちた伝統的なその町のこの平和的均衡を壊すためにやって来た道德上の犯罪者であると見做されたのである。それは Evangelicalism という宗派が従来の Anglican Church に反対の立場を表明して新たに組成されたいわば Anglican Church の Protestant であるというその生成過程からもわかるように Evangelical の牧師達は、Milby にしても Shepperton にしても Knebly においてもその教区のそれまでの国教会牧師がそれだけでもそこの住民の尊敬に価する裕福で高貴な、つまり貴族的な家柄の出身者であったのに対して、旧式な地域社会が最も嫌う、氏素性については誇れるところのないどちらかというと豊かではない低い家柄の出身者がほとんどであったのであって、そのことが地域社会の近代化と共に生じ始めた貧民層の増化への不満や恐れと相まって保守的な土着の住民の反発をより一層強く煽ることになったのであった。住民達の、彼ら Evangelical の牧師達へのそうした反発の思いの中には、Felix Holt の冒頭ですっかり工業化都市化が進んだ地方の町村を前にして George Eliot 自身が 30 年余り以前の村々に対する深い感慨を吐露しているように、

従来の国教会牧師から Evangelical の牧師への教区牧師の交代に対して「中央にこじんまりした魅力的な牧師館と灰色の教会のある村々」で、「貴族的な牧師がいて貧しい者のほとんどいない田園地帯⁽³⁷⁾」の中にある “glory” が侵害されていくことへの反発と、どこに運ばれていくのか皆目わからない大きな時代のうねりに自分達を取り込まれていく恐怖とがあったのである。

(15)

しかし Evangelicalism の地域社会への参入はそれほど急激な宗教上の変革の結果によるものではなく、そうした古いイギリスの農村の持つ “glory” の一部であると George Eliot によって考えられた豊かな教区の国教会牧師 (Rector または Vicar) の地位が Evangelical の牧師がその教区に入りこんでくるやたちまち失墜し、従来の国教会に満足していてそのようなことが起ころうなどと想像だにできなかった地域の土着の住民の心にその Evangelicalism がいきなり混乱の渦を巻き起こすことになったという訳では決してない。実際のところ世俗に墮した国教会の牧師の墜落に対する批判については 19 世紀初めの、その当時の英国議会の報告書 (parliamentary reports) にも見られることであり、当論文の chapter⁽¹³⁾でも見てきた Vicar Gilfil や *Adam Bede* 中の Rector Irwin や *Middlemarch* の Vicar Farebrother やまた *Felix Holt* の Rector Langan には彼らの墜落ぶりに対して 1800 年前後の当時から他の宗派の牧師達から激しい批判があったのである。

Vicar Gilfil の説教の弛緩性については当論文の chapter⁽¹³⁾で見た通りであるが、教区民にとっては、彼の牧師としての優秀性に対するよりも「その昔は Shepperton のような村では見ることもできないような立派な社会層の中で過したこと⁽³⁸⁾」を彷彿とさせる「古風で趣があり優雅な殷勤」な当の Gilfil 牧師の物腰に敬意を表していたのであって、「Gilfil 氏と社交の場を持つことは Shepperton の村の農場主ばかりではなく、その土地の上流階級の間でも歓迎された」のであり、また一方で「牧師ほど牛や馬の品種に通じている者はいない⁽³⁸⁾」と言われ、実際に彼は Shepperton 村から 5 マイルほど離れたところに自分自身の牧場 (grazing-land) を持っていて、事実上の小作人である執筆が Gilfil 牧師の指図に従ってそこを耕作してもいてそれがまた gentry 階級に属する牧師の庶民性を示す一面とも考えられ、彼への尊敬がまた一つ余計に付与されることになったのであったが、またその反面、Vicar Gilfil のそうした教区牧師としての在り方に対して、その同じ教区の独立教会派 (Independent Meeting) の Pickard 牧師は、Gilfil 氏のことを「啓蒙精神など全く持ち合わせていない⁽³⁹⁾」教区牧師であると非難している。さらに Pickard 氏は礼拝の祈祷の中で自分の chapel の外にいる国教会牧師の教区民に対して「ガリオの如く全くこれらを意図せざる⁽⁴⁰⁾」と皮肉っているのである。しかし Gilfil 牧師の礼拝に行くことを旨としていた会衆はそうした Pickard 牧師の声の届く所になど恐れを感じてわざわざ出掛けて行くこともなかったのであった。

また *Felix Holt* の Little Treby の町の、バンダナと brown leggings を外見的特徴とし高貴な血筋の出身者である Rector Langan は、1832 年にその町で起った労働者の暴動の標的とさ

れたし、また *Adam Bede* 中の Rector Irwin 氏も含めたその Hayslope 村周辺の国教会牧師に対しては、Hayslope 村から 3 マイル離れた Treddlestone の traveling preacher (巡回説教師) Roe 氏は、「肉体的な欲望と生活のおごりにふけている者ども」⁽⁴²⁾と非難したあとで、さらに次のように言っているのである。

彼らは動物や鳥の獵や、家を飾り立てることに熱心で、何を食べようか何を飲もうか、何を着ようかなどということに特に深く思いわずらうのだ。信者に命のパンを施すことなど気にもとめず、せいぜい物質的な、魂を麻痺させるような徳性を説くだけであり、一年に一回以上は人々の顔も見ないような教区で牧師の任務を果たすことに対して、金銭を受け取ることによって人々の魂と取り引きしている。⁽⁴²⁾

こうした旧来の Anglican Church への批判は、地主の力が強く旧来の階級制が堅固に保たれている旧社会においてはとりたてて表面化することはありませんでしたとしても、当論文の chapter (12) でも見たように、*Scenes* が書かれた当時のイギリス社会に於ては資本主義がすでに確立され、世の中の主権が富を貯えた新興のブルジョアジーに移り、⁽⁴³⁾ Liberal の風潮が強まってきたのであり、そうした生ぬるい Anglican Church に変る新しい宗教として Evangelicalism が台頭し、またそうした世の中の構造の変化に応じてそれまで余り目立たなかった職工や労働者などの低所得者層が村にふえていくにつれ、そういう者達が持たらしめたもろもろの Dissent が勢力を得るなどという現象は、イギリスの農村のどこでも早晩起こり得ることであつたのである。

そうは言っても、George Eliot がそのような古い貴族的な国教会牧師を過去のイギリスの農村が持っていた glory の一部だと自ら位置付けているように、国教会牧師はそれまで彼らなりに宗教とはまた別の村の独特な道德律や order を形作ってきたのであるし、そうしたものを何より大切に思う地方の保守的な村や町の住民に、それまでに培ってきたそれら道德律や established order をひっくり返そうとしているかに見える新しい時代の思潮をすんなり受け入れる柔軟性を期待することはとうていできない。国教会の中から派生した宗派であるにしても教区民にとっては天と地ほども異なっているように思われるその Evangelicalism に初めて触れた Milby の村の人々の反応については当論文の chapter (12) で見てきたけれども、その新宗教をひっさげて、旧国教会の Vicar Gilfil が 25 年余りも教区牧師として勤めていた Shepperton 村にやってきてからはや 2 年がたっている Barton 牧師に対する Shepperton 村の村人たちの視方は、まず *The Sad Fortunes* の第一章において 80 歳もの高齢になっているが裕福な Cross 農場の主である Patten 夫人のお茶の席における人々の話の中で明らかにされている。Patten 夫人が招待した客としては、隣に住んでいる農場主の Hackit 夫妻と Shepperton 村の隣の Market town である Milby の町から来た Pilgrim 医師の三人で、その他に Patten 夫人が maid 代りにしている Patten 夫人の姪のものはや 50 歳にもなるオールドミス Gibbs 嬢が給仕役としてその部屋に侍っている。Pilgrim 医師が住む Milby の町は *Janet's Repentance* の小説の舞台であつて、Evangelical の Tryan 牧師の到来に対するその住民の反応について当論文の chapter (13) で引用した町であり、あの酒場 Red Lion に於ける Tryan 牧師への激しい排斥運動の時もそうであつたが、Anglican Church 支持者であろうが Evangelicalism の支持者であろうが、とに

かく患者あつての医者という職業柄 Pilgrim 医師は決定的な意見は差し控える傾向にあつた。しかし当時は開業医は患者のところに往診に行くのが普通であつたので、近隣の町で取りざたされている gossip や rumor にとても明かるかつたのである。そしてこの場においても最初に話題を提供したのは Pilgrim 医師であつた。

「この前の日曜日、Shepperton Church ではひと騒動あつたようすな。午前中聖歌隊のバスーン奏者の Jem Hood のところへ彼の妻君の診察に行っていたんだが、Jem は息巻いて、必ずやあの牧師の野望に仕返ししてやるぞ、あのいまましいおせっかいなメソジスト野郎め、どんなことにも手出しせにやならんと思つてるんだからと怒っていましたよ。一体全体どういうことなのですか。」

(Mr. Hackit) 「いや全く下らないことでして。つい最近結婚したばかりのカップルのためにみんなが婚礼祝歌を歌い始めたんですよ。祈祷書にあるものと全く同じようないい歌詩の上にとってもいい節まわしのやつをねえ。それはわしが小さい子供の頃から新しい夫婦が誕生する度にずっと歌われてきたものですよ。これ以上のものはまたないでしょう。……ところが Barton 氏はどうしてもれっきとした賛美歌にしろって言うんだ。私にや全く歌えない曲の賛美歌をねえ」

(Mr. Pilgrim) 「それで彼は『黙れ』と一喝して、説教壇に立つて行き、Dissent の礼拝堂で歌われる賛美歌の節回しで自分からそれを歌い出したのでしょうか？」

(Hackit 夫人) 「そうなんです。それで七面鳥の雄鶏のとさかのように顔を真赤にしたんですよ。あの牧師さん、従順の徳についてお説教する時がありますが、その時は自分の顔に自ら平手打ちを加えてるってことですよね。あの方は私によく似てらっしゃいます。あの方はあの方特有の癪癢を持っておいでです。」

(Mr. Pilgrim) 「どちらかというと育ちがよくないと思われますな、Barton さんは。人の噂じゃあの人のお父さんという人は非国教徒 (Dissenter) の靴屋だそうすな。それであの人自身も半分は Dissenter なんですよ。あの方は日曜の夕方になるとここの百姓家で説教するんでしょうが？」

(Mr. Hackit) 「あの聖書も何も持たないでやるお説教は全然ためになりませんよ。その牧師に才能があつて聖書を端から端まで熟知している場合はそれでもいいですがねえ。……でも我々のここの牧師さんは、そんな才能などからきしありゃあしない。その時やる説教をちゃんと書き止めてでもおけばそれなりに聞いてもらえるいい説教ができようものを。でもあの方は本も何もなしでやろうとするもんだから、とりとめなく話しちまって、主題にそつたまとまつた話ができなくなってしまうんだ。それで倒れ込んじまって二度と立ち上がれない羊のように、時々につちもさつちもいなくなっちゃう。」

(Patten 夫人) 「やれやれ、もし Gilfil 牧師様が生きてらして、この10年ほどの間の教会内での変わりようを御存知になりましたら何とおっしゃいますでしょうかしら。私は最近のような新しい宗教の教義は理解できないんですよ。Barton 牧師は家に来て私の顔を見ると私が罪深いだとか、神の御慈悲を乞わねばとか、そんなようなことばかりおっしゃいます。でもねえ Hackit さん、私はこの年になるまで一度だって罪人と呼ばれるほどのことはしてきていませんよ。……もし私が救われないというのなら救われなくて困る人がいっぱいいることになりますよ。そういうことからしても私がもう教会に行かれなくなったことはかえってよかつたですわ。だって昔のあの聖歌隊がお払箱になってしまうとすれ

ば、主人の生きていた頃のものは何一つ残されていないでしょうからねえ。その上何とあの教会を壊して新しく建てかえるという話が決まったそうじゃありませんか。」

(Hackit 氏) 「牧師さんにととう頼みこまれてしまいましたよ。この春にはあの教会の取り壊しにかかります。でもまだ十分にお金が集まっていないのですよ。私はお金が全額集まるまで待つべきだと言っているのですが。私の見る所では、最近会衆が減ってきているように思われるんです。もっとも Barton さんはそれは人々がせっかく教会に来て居る所が全然ないからだと言っているのですけれども。Parry 牧師がやっていた頃は会衆は大したものでしたよねえ。人々は教会の側廊にまで立っていたものです。でも私の見る限りではこの節じゃ一度だってあんなに多勢の会衆が来るなんてこたありませんや。」⁽⁴⁴⁾

(16)

これが「文化水準は Knebly 村のそれと比較したら Atica の状態にある」と言われまた「Public opinion (世論) というものが存在している」と言われている Shepperton 村に住む主だった人々の、Gilfil 牧師に代ってその村にやってきて 2 年がたった Barton 牧師自身と、Barton 牧師が体现している新しい国教会分派の Evangelical に対する public opinions である。まずは Barton 牧師が村人達に強制した新しい聖歌への反発についてであるが、世の中の近代化に伴い当時聖歌集にも大きな変革があつて、他の村々と同様に Shepperton 村でも、「その一流人の詩的審美眼は Sternhold と Hopkins によって作り上げられた」と言われているほどの昔から歌い継がれてきたその Sternhold と Hopkins によって編まれた聖歌集が、Tate と Brady による新版聖歌集に取って変わりつつあつたのである。*Silas Marner* の Raveloe 村に於てもそうであつたように Shepperton 村においても日曜毎の礼拝の時の聖歌合唱と「basoon 奏者や two key-bugles 奏者やそれからテノール歌手としてすばらしい才能を発揮する大工とそれにあと二人のそこそこの歌手」で構成された聖歌隊の演奏は、週に一度の礼拝時にそれぞれの者がそれぞれに応じて持てる才能を発揮し自分が主役になつたような晴れがましさを感じることができる数少ないチャンスを彼らに与えてきたばかりか、楽しみの少なかった当時の日曜毎の礼拝を盛り上げ会衆の誰でもが心から楽しむことのできる格好の entertainment だったのである。特に Shapperton 村のその聖歌隊は、村人の持てる文化の粋を集約したものとして、村の誇りとなつていて「隣の教区からも聞き手が集ってくるほどのすばらしい呼びもの」でもあり、村人達はそうした聖歌隊に対して深い愛着と大きな誇りと欠けがえのないものとしての価値を感じていたのであつた。そして「大切なことは新しさではなく繰り返しであつた」⁽⁴⁸⁾ Shepperton の村の文化としての聖歌合唱や聖歌隊のあり方の中においては何一つ新しい要素が加わつてはならず、過去から脈々と踏襲されてきてさらにそのままの形で未来に繋ぐ永続的なものであつてこそそれはなお高い価値を持つものであつたのである。そしてまた聖歌合唱も聖歌隊も村人達がそれまで馴染んできた「聖歌」があつてこそ存在しうるものであり、「賛美歌の刷新」という新しい時代の潮流に従つてそれまでの聖歌が Barton 牧師によって“Silence”という一喝で否定され、以後の日曜礼拝の折から新しい聖歌集の中にある、聖歌隊の演奏の必要のない、「Dissent の礼拝堂で歌われる節回し」で馴染のない聖歌を歌うことを強要された

というのは、日曜礼拝の時に確固としてあった、それら住民達が喜びを持って迎えていた楽しみの要素を彼らの心の中から一瞬にして消し去ることを余儀なくされたということなのであって、上の引用文に登場する人達は社会的な身分のある品位を持った人々であるためそれほどの強い怒りを露にしているもの、あれやこれやの総合的なそうした新しい時代の流れを、これまで見てきた通りの旧式で閉塞的な地域共同体である Shepperton の村において、何の躊躇も疑問もなくまさに dogmatic とも思われるやり方でどしどし押し進めていく Barton 牧師に対して、一般の村人の心の中には総じて Pilgrim 医師がその朝きいたというバスーン奏者の Jem Hood が吐露した激しい怒りと同様のものがあったということは容易に推測できる。こうした Evangelicalism や Barton 牧師への多くの者達の明からさまな批判や非難の声の中における作者 George Eliot の conservative-reforming intellect としての立場は、“good-natured person” であり教会委員でもあるという立場からもはや二度と歌われないであろう婚礼祝歌に限りない愛惜の念を持ちながらも新しい聖歌を半ば認め、そして旧教会を取り壊し、新しく教会を建て直すという Barton 牧師の意図を受け入れざるを得なかった Hackit 氏の立場に見ることができるであろう。

Janet's Repentance の Milby の町で、裕福な弁護士 Dempster が、Evangelical の牧師である Tryan 牧師排斥の署名運動を促進しようとしている Budd という男に、「まさか君は Pilgrim にサインしてもらおうなんて思っているのではないだろうね。何しろ彼は 10 人余りほどの Tryan 派の肝臓病患者を診ているんだからな。胆汁過剰を引き起こすのには偽善的なお定まり文句や Methodism に勝るものはないからねえ⁽⁵⁰⁾」と Pilgrim 医師の日和見的な態度を皮肉って言っているように、Milby の町においては Evangelical とその牧師 Tryan について今一つはっきりとした自己の独自の立場を表明していなかった Pilgrim 医師も、先の引用文の中に見られるこの Shepperton 村の Patten 老夫人の暖かい炉端のお茶の席では、Barton 牧師に対して激しい怒りを抱いている Jem Hood からきいたという形、つまり rumor という形態の中に、Barton 牧師に対する意見をおそろおそろ打診し、そして大方の者達の中に多かれ少なかれ根強い反発があることを見て取ると、大切な自分の患者である Hackit 夫人が、彼女の心の中に最近芽生え始めた Barton 牧師の活動を一部是認する気持を吐露し始めるまで Barton 牧師への攻撃的な口調を次第に強めていっていることを伺い知ることができるのである。Pilgrim 医師が自分の教区の牧師でもないのに隣の村に来た Barton 牧師を嫌う理由は、Shepperton 村の他の村人達が抱く嫌悪感のように、Barton 牧師が Evangelical の牧師であってそれまでに培われてきた村の伝統を打ち壊す文化の悪魔的破壊者であるからということではなくて、Shepperton 村も Pilgrim 医師の活動の主だった場であることを全く意にも介せず、Barton 牧師が最近新しい医者と呼び寄せて Shepperton に住ませたという事実と、Barton 牧師が自分自身薬をいじる道楽があり、それまで Pilgrim 医師をかかりつけとしていた患者の病気を治癒させたという実績があったからである。つまり Barton 牧師は Pilgrim 医師を Shepperton 村への赴任当初からないがしろにし、Pilgrim 氏の医師としての誇りを著しく傷つけたばかりか Pilgrim 氏が最も重きを置いている彼の利害にまで立ち入ったのであった。*Middlemarch* の医師 Lydgate の人生

においてもわかるように、当時の医学界は何にも増して保守的で旧弊かつ閉鎖的であり、医師たちは総じて自分の治療法と医者としての立場に絶対的な自信と誇りを持ち、新しい医者の進入により自分の患者を奪われることや、またそうした自分の医療に対する自信や誇りを汚されることにひどい侮辱を感じたのであった。そしてこの Pilgrim 医師に対する Barton 牧師の態度は、Barton 牧師の妻 Milly の臨終時にも多くの医師が往診に訪れた中に Pilgrim 医師の姿が一度もなかったことから見ても、彼が Shepperton 村にいる間中ついに変わることはなかったのであった。

この Patten 夫人の家の炉端でのお茶会の席に集う人々は、当の Patten 夫人も含めて五人と人数的には極めて少ないのであるが、先の引用文をつぶさに見るとそれぞれの者が異なった立場にあるのであって彼らは自己の持つその独自の立場から意見を述べているのである。つまり Pilgrim 医師は上に記したような医者としての個人的な立場から Evangelical というよりも人間としての Barton 牧師に嫌悪感を感じているのであり、Mr. Hackit は先にも述べたようにもともと穏やかで good-natured person である上に教会委員であるという社会的立場に立ち conservative-reforming intellect である作者当人の立場に近く、新しいものを全面的に否定することができない心理的状況から変革の憂き目にさらされている古い宗教とそれが付随して持っているもろもろの二義的なものを限らない愛惜の情を持ってながめ、そして Evangelical とそれを具現する Barton 牧師とを冷静に客観的に批判し、また Hackit 夫人は Evangelical 批判とは別のものである Barton 牧師個人への牧師らしくない人間的欠陥を指摘しており、それから Patten 夫人は最高齢者として Evangelicalism と Barton 牧師に対する視方は最も厳しく、Barton 牧師によって具現されているその新しい宗教が Gilfil 牧師によって作り出された村の glory を打ち壊し暗黒の時代を招く原因であるかの如く絶望しているのである。

Patten 夫人が Barton 牧師と牧師の背後にある Evangelicalism に対してそのような断固とした否定的な態度を示しているのは、40 年ほど前に Shepperton の牧師館に Gilfil 牧師が夫人の Caterina を伴って教区牧師としてやって来て以来彼が死を迎える 30 年余りもの間彼が愛妻 Caterina に寄せてきた恋と愛の結末をすべて見知っている教区の中でも唯一の人として、Caterina の死後 10 年ほどして Shepperton に移って来た Hackit 夫妻などに比べたら Caterina の死という深い悲しみを背負った Gilfil 牧師への人間的な同情と、その悲しみゆえになおさら彼女の目に輝いて見えていた Gilfil 牧師への思いが、彼の死後もはや 7～8 年がたとうと言うのにまだ消えやらないどころかいやまして強く胸の奥にあって、新しいものに順応性を欠いた年寄りの頑迷さも手伝って Evangelicalism という新しい宗教も、その宗教に立脚して新しく Shepperton にやって来た Barton 牧師も頑に受け入れようとはしない心の作用があったのである。

しかし実際はこうであった。Barton 牧師がこの前 Patten 夫人を訪問した折に、Patten 夫人に「あなたはあなたの持っている富の管財人に過ぎないのであって、神の栄光に浴そうと思うなら Shepperton 教会の再建にしっかりまとまった寄付金を出すべきだ」とこんこんと言ってきかせて、Patten 夫人が約束していた 20 ポンドの額の寄付金をさらにずっと拡大するように強く迫ったのであった。

(51)

(52)

Patten 夫人は George Eliot の他の小説の中に登場する死をそう遠くない将来に控えている老人達と同様に、生前の夫に対する敬愛を夫亡き今は富にその対象を移し自分の富を増やすことに対しては貧欲である上に、常に念頭にある遺産の配分に対しては、Patten 夫人と同居して夫人のことを何くれとなく世話をしている 50 才余りものオールドミスである姪の Gibbs 嬢に対して「血縁者故の増悪」から多くを残す気は全く考えておらず、多くの遺産を当てにしていると思われる Gibbs 嬢の思惑の裏をかいてほとんど交流のない、亡き夫の遠縁に当たる者に大体を残そうとほくそえんで考えているような意地悪なところがある。Cross Farm でのお茶の席での引用文の中に見られる Patten 夫人の Barton 牧師へのあのような非難の言葉は、そうした Patten 夫人の金銭への感覚に Barton 牧師の言った、この引用文にあるような新教会建設への寄付の増額を迫る言葉がより強い響きを持って Patten 夫人の心の琴線にふれ、Patten 夫人の牧師への反感がさらに強められて述べられたものであるに違いなかったが、Patten 夫人のそのような Barton 牧師の批判の裏に Barton 牧師なりの doctrine があるのを知っていた Hackit 氏は、このように言う Patten 夫人の言葉に heathenism を感じて shock を受けたのであった。

しかしこの後 Cross Farm のお茶の席においては、Barton 牧師の rumor、gossip は、次のように次第に趣を異にし始める。

(Gackit 夫人) 「私は Barton さんが好きですよ。頭を駆使して仕事をするという方じゃありませんが、とてもいい人だと思いますよ。……」

(Pilgrim 氏) 「あの百姓家でする説教ですが。先日そのことについて私どもの牧師 Ely 氏に話しましたが、彼はそんなものは頭から賛成しちやいせんよ。彼はこう言いましたよ。宗教的な教義をそんなに慣れなれしいものとして扱うことは良いところもあるけど害も多いものだってね。」

(Hackit 夫人) 「さあそうしたことはわかりませんが。でもめったに教会に来たことのない村の農場労働者や靴下職人達があの百姓家での説教はききに来るのですよ。そうしたことは一週間中いいことを何もきかないよりは、ずっとましなことだと思いますよ。それに Barton さんが始めた小冊子頒布会 (Track Society) というのがあります。私はこの教区に住み始めてからあんなにたくさんの貧しい者達が冊子を配って歩くのを見たことはありません。彼らには何かしてやらなくちゃいけないことがあるんじゃないでしょうかしら。共済組合で酔っぱらっているなんてみっともないっらないですもの。Dissenter であるということだけはわかっているのですがでもちゃんとした信念を持った人は男の人の中でも女の人の中にもほとんどいませんよ。」

(Patten 夫人) 「でもねえ、貧乏人であろうが金持であろうが御近所の人達におせっかいをやいてよかったためしはありませんよ。雨が降ろうが晴れていようがどんな天気でもおかまいなく女達が家から家へとどのろと回って歩くなんてのは見るのもいやですわ。ずるずるスカートのすそを引きずり、ぬれてどろだらけにしたあげく、靴もそっくりどろどろにして帰ってくるなんてねえ。Janet (Gibbs 嬢) も小冊子頒布の仲間に加わりたいたんて言いましたが、私のこの家にあんな小冊子配りをする者なんか一人としていてほしくないと言ったんですよ。私が死んだら彼女は好きにふるまってもかまいませんけれども。私

なんか今まで一度だってスカートの裾を引きずってうろついたりしたことはありませんよ。それにあの手の宗教は私にはてんでわかりませんしねえ。」

(Hackit 氏) 「それはないでしょうとも。あなたがスカートの裾を高く持ち上げたことがあるとすれば、きりっと引きしまったそのあなたの足首を見せるためだったでしょうからね。でもみんながみんな足首きりりという訳にもいかないですから。」⁽⁶⁴⁾

Patten 夫人のお茶の席において明らかにされた、Evangelicalism とその牧師である Barton 氏に対する Shepperton 村の public opinion はこれで一応の結末を迎える。これまでていねいに拾い上げてきた数々の会話の引用からもわかるように、Shepperton 教会での礼拝時の聖歌隊の中心メンバーであるバスーン奏者としてこれまで活躍してきた Jem Hood の心に激しい怒りをかきたてた Barton 牧師の言動に対する rumor という形で噴出した Barton 牧師への gossip は、彼への批判的見解の中に足並を揃えているように見えはしたものの、Cross Farm でのお茶の会の時の経過と共に各々の間の見解の差異を徐々に明確にし始めて、この席が解散する直前に到っては、ここに集う五人のうち一人として同じ立場をとっている者がいないということが明白になるのである。Janet's Repentance の Milby の町で Evangelical の Tryan を支持する者が、貧民層の中に於ては言うまでもなく青踏 (blue-stocking) などの進歩的な婦人層の中に急速に拡大していったように、市場町 Milby より都市化の遅い Shepperton 村においても Evangelicalism の浸透は、現にこのお茶の席のメンバーである Gibbs 嬢が Barton 牧師が進めている Evangelical の活動の一つである Track Society⁽⁶⁵⁾ に加わりたいという意向を持っていることが明らかにされていることからわかるように、古い土着の人々の強い勢力の陰になってはいたものの水面下ではかなり進んでいたのではないかと思われる。そして先に述べたように自分の世俗的な利害関係だけに自己の考えを立脚させている Pilgrim 医師と、富裕な老人特有の頑迷さで保守的な物の視方に固執している Patten 夫人は別として、Hackit 氏は教会委員 (church warden) として、村の道德律と秩序の安定化に寄与する教会の function を遂行させるために現代的なそしてさらに将来的な見通しに基づいて Evangelicalism と Barton 牧師を positive に考えている面もあるのであり、また Hackit 夫人は貧民層の増加を伴って起った当時の社会的変化を不可抗力の現象として眺め、Shepperton 村に於ける貧しい者の存在を Patten 夫人のように頭から拒否するのではなくやさしい眼ざしで受け入れ、従って彼らが必要としている Evangelicalism と Barton 牧師に対しても人道上の面からそれはそれとして是認し得る立場を表明しているのである。そして彼らが Barton 牧師と彼の Evangelicalism に対しての Shepperton 村の村人達の総合的な public opinion を代弁しているものとすれば、年 80 ポンドの収入しかなく⁽⁶⁵⁾すでに 6 人の子供がいる上に近々更にもう 1 人生まれるという大家族をかかえた Barton 牧師の、牧師としての、あるいは他所から流入してきてまだ 2 年ほどしかたっていない、Sthpperton 村のいわゆる stranger としての立場は、好転の兆しはやや見られるものの、当面はまだまだ極めて厳しいものとなろうということが容易に察せられる。

このように George Eliot は、その後の彼女の小説のスタイルとなっている gossip や rumor の持つ力を彼女の最初の作品であるこの *The Sad Fortunes* においてすでにかなり完成度が高

い状態で使っているのである。つまり Patten 夫人の Cross Farm でのお茶の席上で成された Barton 牧師の gossip や rumor がそうであったように George Eliot の小説では hero や heroine などの主だった登場人物は小説の現場に彼らが実際に登場する前に、その者が属する community の public opinion を成す gossip や rumor などによってまず読者に彼らの置かれている社会的立場について何がしかの suggestion を与えるように構成されているのである。これまで当論文で紹介してきた Barton 牧師についての rumor や gossip から読者である我々が抱く suggestion をもう一度整理しまたもう一步掘り下げてそこに見られる Barton 牧師の実像を明らかにするとすれば、まず第一に Barton 牧師は、Shepperton 村における宗教も含めた社会状況の大きな変革のあった時代に、それまでの国教会とはがらりと様相を異にしている Evangelicalism の、それも地域と緊密に結びつかなければならない教区牧師として村に赴人してきて 2 年がたつものの、平和な古い村の慣習から脱し切れない住民には決して容認しがたい客だったのであり、そして第 2 に Barton 牧師自身が貧しい家柄の出身であることや説教がへたなことやまた彼の dogmatic な性格等々によって閉塞的なその村において自分の立場をなお更困難なものに追い込んでいっている哀れな牧師であったということができるのである。そうした suggestion を得たあと、chapter 2 で実際に彼が姿を現わした時、我々は彼の動向を見てそれが例えどんなに唐突で奇妙なものであろうともすでにある suggestion との兼ね合いで極めて自然にそれを受け入れ納得することができるのである。更にその suggestionの中には地域の人々の精神生活を司どる牧師という職業にある Barton 牧師がその生を全うする上で解決されなければならない大きな問題を含んでいて、それがその後の story の展開の中でどのような方法で解決していくかということがその小説のテーマになるのである。具体的に言えば Barton 牧師への村人達の反感や嫌悪感や嘲笑がその後いかにして克服され、Barton 牧師の前任者である Gilfil 牧師のように Barton 牧師がいかにして村人の心を勝ち得て Shepperton 村における自分の地位を安定させ更に定着させていくかということがこの小説のテーマなのであって、それはこの *Sad Fortunes* の小説の最初の suggestion の中ですでに示されるのである。このような大きな働きをする rumor や gossip の力は、George Eliot の小説が個人と地域共同体との間の関係に人間存在の根本を探ろうという意図を置くこと⁵⁶⁾からくるものであろう。

第 2 章からの Barton 牧師の *Sad Fortunes* と rumor、gossip の働きについては次号で述べることにする。

注

- (1) 上田女子短期大学紀要 27 号；2003 年 12 月刊
- (2) Shepperton Church was a very different-looking building five-and-twenty years ago. To be sure its substantial stone tower looks at you through its intelligent eye, the clock, with the friendly expression of former days. (*The Sad Fortunes of the Reverend Amos Bartontown*, chap. 1)
- (3) *Adam Bede*；1859 年に出版。*The Sad Fortunes of the Reverend Amos Barton, Mr Gilfil's Love-Story*、それに *Janet's Repentance* の 3 つの中編小説が収められている *Scenes of Clerical Life* (1858

年) 出版後、George Eliot の最初の本格的な小説であるとされている。

- (4) *Silas Marner* ; 1861 年 都市部における熱心な信徒であった織工 Silas が信仰に幻滅し古い農村に移住して再び信仰を回復していく物語。
- (5) *The Mill on the Floss* ; George Eliot の自伝的小説、兄と妹との関係に主人公 Maggie の許されぬ恋がからむ。
- (6) *Felix Holt the Radical* ; 1832 年の時代設定の下で没落していく貴族階級と拡大していく労働者層との確執を描く。
- (7) *Middlemarch* ; 地主階級に属する Dorothea と医師 Lydgate の人生の story。gossip、rumor に対する作者の概念の確立が見られる。
- (8) エンクロージャー ; 18 世紀後半に起った地主による農地運用法における変革。「従来一年の全部または一部にわたって共同権 (common right) が存在していた土地を、かきね、その他の境界標識で囲み、共同権を排除し、私有地であることを明示」したものでこうした動きは荒蕪地 (waste) にでも、共同地 (common) にでも開放耕地 (open-field) にでも行なわれ」た。この運動は英仏間の植民地争奪戦の総称である、1689 年から 1697 年のファルツ侵略戦争などにより政府支出が増大され、それと共に人口の著しい増加があったため、18 世紀半ばにすでに穀物輸入国に転じていたにもかかわらず、穀物、その他の食料品の価格騰貴を招き、大農業資本家が土地生産物の増産を目的として行なった農村内の動きである。—上田女子短期大学紀要 14 号 (1991 年 3 月刊)『*Adam Bede* の Hayslope 村、*Silas Marner* の Roveloe 村、*Felix Holt* の Little Treby 村がそれぞれの小説に意味するもの』3 章参照 「 」内は『英国産業革命史』(一条書店、小林芳喬著、昭和 39 年、P. 225)
- (9) 産業革命 (Industrial Revolution) ; 1760 年代のイギリスに始まり 1830 年代以降欧州諸国に波及。動力機械の発明と応用が、生産技術に画期的な変革を持たらし、工場を手工業的形態から機械制大工業へ発展させ、その結果社会、経済のあらゆる面に生じた変革と発展の総過程。この産業革命を経て初めて近代資本主義経済が確立。
- (10) 同上上田女子短期大学紀要 14 号『*Adam Bede* の・・・』3 章
- (11) New Police ; Sir Robert Peel established the London Police force in 1829. (Notes in *Amos Barton*)
- (12) Tithe Commutation Acts ; (whereby the 'tithe' or tenth part of a parisher's produce due to the church could be converted into a fixed sum) was passed in 1836. (Notes in *Amos Barton*)
- (13) The universal penny-post was introduced in 1840. (*Ibid.*)
- (14) all guarantee of human advancement (*Amos Barton* chop. 1)
- (15) Methodism ; プロテスタント教会の教派の一つ。1730 年代にイギリスのウェズリーらが Oxford で起こした敬虔主義的運動。英国国教会の改革運動に始まり、監督制度と代議制度を統合する。*Adam Bede* の Methodist の女説教者 Dinah Morris の宗教活動に見られるように巡回説教を旨とする。
- (16) Catholic Emancipation Act ; (1829) which gave Catholics equal rights with Anglicans in many aspects of legal and business life, was seen by many Anglicans as a betrayal of the Protestant constitution.
- (17) 上田女子短期大学紀要 27 号 ; 2003 年 12 月刊
- (18) Church of England ; 16 世紀に政治的な妥協の産物として設立。以後 2 世紀ほど経る間にすっかり

- 沈滞した。(Ibid.)
- (19) curate ; Anglican Church の rector や vicar の補佐。あるいは教区牧師の代理。
 - (20) *Amos Barton*, chop. 1
 - (21) 当学紀要27号当論文 chap. 11 参照
 - (22) Wordsworth ; William Wordsworth ; 1770-1850 イギリス桂冠詩人。湖畔詩人の一人で Coleridge との共同出版 *Lyrical Ballads* は汎神論的な自然観照をうたい、ロマン主義の一時期を画した。ほかに自伝的長詩『序曲』など。
 - (23) *Blackwood Edinburgh Magazine* ; George Eliot 自身ともまた彼女の事実上の夫でもある George Henry Lewes と旧知の間柄である Blackwood 氏が出版した雑誌。 *The Sad Fortunes, Mr Gilfil's Love-Story, Janet's Repentance* の、George Eliot の最初の中編小説が相次いで発表された雑誌。
 - (24) They (Readers) would have found the story's anonymous writer appealing as directly to their appetite for knowledge and controversy as to their fondness for the humour and pathos..... (Introduction of *Amos Barton*)
 - (25) 当紀要 注(19)参照
 - (26) You already suspect that Vicar did not shine in the more spiritual functions of his office ; (*Mr Gilfil's Love-Story* chap. 1)
 - (27) *The Sad Fortunes of the Rev. Amos Barton*, chap. 1, P 9
 - (28) Ibid.
 - (29) Attic ; belonging to ancient Athens, or Attica. Athenians believed the people of neighbouring Boeotia to be ignorant and oafish.
 - (30) 同上 chap. 1
 - (31) *Adam Bede*, chap. 37
 - (32) Oxford movement ; 1830年代、Evangelicalism を生んだ Low Church に対し、High Church の活動として Anglican Church と Catholic との血縁性を主張する。Emancipation Act に移ろう。
 - (33) 同上 chap. 1
 - (34) Ibid.
 - (35) *Janet's Repentance*, chap. 1, Penguin Classics, P 197 1. 1 ~ P 201 11. 7 主な会話だけ pick up したもの。
 - (36) Ibid.
 - (37) *Felix Holt, the Radical*, Introduction
 - (38) *Mr Gilfil's Love-Story*, chap. 1 Penguin classics, *Scenes of Clerical Life* P 86
 - (39) 同上、P 84
 - (40) Gallio-like, ; Acts XVIII ; 12-17 describe how the Roman consul Gallio refuses to adjudicate when the Jew of Achaia accuse the christian missionary Paul of persuading men "to worship God contrary to the law."
 - (41) 同上 chap. 1
 - (42) *Adam Bede*, chap. 5
 - (43) 当学紀要14号 同上のタイトルの chap. 2
 - (44) *Amos Barton*, P 12 1. 15 ~ P 14 1. 23 主だった会話を pick up
 - (45) *Mr Gilfil's Love-story*, chap. 1, P 83

- (46) *Amos Barton*, chap. 1, P 9 In an attempt to watch the attractions of ‘chapel’, forty new hymnals were published between 1801 and 1820 for use in the Church of England. These replaced the customary metrical rendering of the psalms in the “Old Version (by T. Sternhold, John Hopkins and others, 1562) and ‘New Version’ (by Nahum Tate and Nicholas Brady, 1696)
- (47) *Amos Barton*, chap. 1
- (48) *Amos Barton*, chap. 1
- (49) *Mr Gilfil’s Love-Story*, chap. 1
- (50) *Ganet’s Repentance*, chap. 1
- (51) 20ポンドの金額がどれくらいの価値を持つものかということについて、当時は貧民層を形成する労働者の賃金が年平均50ポンドであり、またAmos Barton牧師の、驚くほど安いと言われた年収が80ポンドであったことから大よそ判断がつくであろう。
- (52) *Amos Barton*, chap. 1
- (53) Track Society ; The religious Track Society was founded in 1799 by Anglicans and nonconformists to publish and distribute tracts, or normally improving pamphlets.
- (54) *Amos Barton*, chap. 1, P 14 1. 24 ~ P 16 1. 11 主だった会話を pick up.
- (55) 哲学者コントの説く「人類は総体であり個人は一部分である。したがって個人はあらゆる意味において全体である人類に服従すべきものであり、おのれを殺して他人に生きるのがわれわれの最上の道徳である」という実証哲学に George Eliot は大いに共鳴していた。またそれに基づいて彼女は “There is no private life which has not been determined by a wider public life” と自ら述べている。(「サイラスマーナ」岩波文庫 土井治訳、1988年、解説、*Felix Holt* (Everyman’s Library), chap. 3)
- (56) 上田女子短期大学紀要14号、「*Adam Bede* の Hayslope 村、*Silas Marner* の Raveloe 村、*Felix Holt* の Little Treby 村がそれぞれの小説に意味するもの」 chap. 1 「はじめに」 参照。